

〈論文〉

中国語訳『奥の細道』の比較研究 (4)

田 中 幹 子 ・ 鄭 寅 瓏

はじめに

今まで三回に渡り、中国語訳『奥の細道』の比較研究を発表した^(注1)。本稿はその続きである。但し、本稿からは発句として著名な章段を中心に抜き出して比較分析して行くこととする。本稿から新たに、出版年度が初版が1981年、校訂版が2004年の閻小妹氏・陳力衛氏訳も比較対象とし、既に紹介した中国訳と混乱しないために⑥閻小妹訳として紹介する^(注2)。また本稿から分析方法を改めた。原文全体を逐一比較するのではなく、問題点となる部分に絞り、その部分に集中して論じる体裁に変える。今まで問題点となる部分に傍線をひいた。同様に現在中山大学外国語学院博士研究員鄭寅瓏氏に中国語の翻訳をお願いした。『奥の細道』原文及び章立ては今までと同様日本古典文学新全集『松尾芭蕉集』2「紀行・日記編」を使用する。

一、

【原文】

〔二八〕

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有り。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河に落入る。康衡等が旧跡は、衣が関を隔て南部口をさしかため、夷をふせぐと見えたり。扱も義臣すぐつて此城に籠り、功名一時の草村となる。国破れて山河あり、城春にして草青ミたりと、笠打敷て時のうつるまでなみだを落し侍りぬ。

夏艸や兵共が夢の跡

卯花に兼房みゆる白毛かな 曾良

兼て耳驚したる二堂開帳ス。經堂ハ三將の像を残し、光堂ハ三代の棺を納メ、三尊の仏を安置ス。七宝散うせて玉の扉にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既退廃空虚の草村となるべきを、四面新に囲て、薨を覆て風雨を凌、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降残してや光堂

①張香山訳『奥州小道』（1987年2月全文掲載）

三代^①荣华一梦中。在前面一里地方,还留有正门的遗迹。秀衡氏の宮殿遗址已变成田野,只是金鸡山还保留着原来的面貌。首先登上了高馆^②,看到从南部^③方面流过来的大河北上川。衣川环绕着和泉城,在高馆下面流入大河。看到泰衡等所住邸宅的遗址,它面对衣关,警卫着南部口,看来似为防御虾夷族。还有,选择忠义之臣,据守此高馆^④,功名之梦一瞬间,战尸今已成草丛了。国破山河在,城春草青青。坐在铺于地上的斗笠上,忘掉时间的消逝,流下了眼泪。

武士们怀着功名之梦
的战迹处,
夏草萋萋

水晶花开,仿佛如勇将
兼房^⑤的白发。

久以豪华闻名的二堂^⑥,举行揭帐拜佛^⑦,经堂中有三将^⑧塑像,光堂中贮藏着藤原氏三代的棺木,佛坛上安置着三尊佛像^⑨。装饰的七宝已经散失,嵌有珠玉的门扉,被风刮破,贴有金箔的殿柱为霜雪所侵蚀,在即将成为蔓生丛草的废墟时,在堂的四周又重新砌上围墙,上覆屋顶,以御风雨,总算暂时把这所古老的纪念物保存下来了。

梅雨,也许偏偏
不洒降光堂^⑩

①三代——即藤原清衡、基衡、秀衡。此三代住平泉,极尽豪华富贵,关秀衡之子泰衡为源赖朝所灭。

②高馆——源义经投奔秀衡庇护时,所住之馆(贵人之邸宅称馆,较城为小),当地俗称判

官館，又称衣川館。

- ③南部——近世泛称奥州北部为南部。源赖朝征伐奥州时，其部将南部光行有功，遂将奥州糠部五郡赠封给他。故以后称这一带为南部。
- ④据守此高館——指源义经选拔忠勇之士据守此高館，被后人认为是一瞬功名。
- ⑤兼房——义经没落时，老臣增屋十郎兼房，披着苍苍白发，奋战而阵亡（《义经纪》）。
- ⑥二堂——中尊寺内的经堂与光堂。
- ⑦掲帳拜佛——掲开佛龕的帷帳供信徒拜佛。
- ⑧三将——指清衡、基衡、秀衡三人之像。但实际上并无此三将之像。
- ⑨三尊佛像——中为阿弥陀如来，左为势至菩萨，右为观世音菩萨。
- ⑩光堂——光堂外面贴着金箔。这句俳句的意思是：降着梅雨，景物都显得晦暗，但光堂却闪着金色的光亮，恐怕梅雨唯独没有洒降在光堂上。

〈張香山訳の日本語訳〉

三代^①の栄華は夢一つの中にある。ここから先一里のところに、正門の遺跡がまだ残っている。秀衡の宮殿の遺跡はすでに田野となり、ただ金鶏山だけがもとの姿のままに残っている。まず高館^②に登ると、南部^③方面から流れてくる大河北上川が見えた。衣川は和泉城を廻り、高館の下で大河に流れ込む。泰衡たちが住む邸宅の遺跡が目に入り、衣関に向かって、南部の入り口を警備していて、蝦夷族を防ぐためのようだ。そして、忠義の臣を選び、この高館を守らせたが^④、功名の夢は一瞬のことで、戦った人の死体が今すでに叢となった。国破れて山河在り、城春にして草青々し。地面に敷いた笠に座って、時間の流れを忘れて、涙を流した。

武士たちは功名の夢を抱く。

戦った遺跡のところに、

夏の草が生い茂る。

水晶の花が咲き、勇ましい兵士のようだ。

兼房^⑤の白髪。

豪華さで知られている二堂^⑥では、帳を開き仏を拝む儀式が行われる^⑦。経堂に

は三将^⑧の像があり、光堂には藤原氏三代の棺が納められ、仏壇の上には三尊の仏像が安置されている^⑨。装飾用の七宝が散逸し、珠を嵌めた扉が風に破られ、金箔の張られた柱が霜雪に蝕まれた。つる草が生い茂る廃墟になりかけた時、堂の周囲にまた塀を立てて、風雨を防ぐために、屋根を覆い、やっとしばらくの間この古い記念物を保存することができた。

梅雨は、もしかしたら、

光堂だけに降り注がなかったかもしれない。^⑩

- ①三代：藤原清衡、基衡、秀衡である。この三代は平泉に住み、きわめて富貴で贅沢な生活を送った。関秀衡の息子泰衡は源頼朝に殺された。
- ②高館：源義経が秀衡の庇護に身を寄せた時に住んでいた居館である（貴族が住んでいる場所は館と呼び、城より小さい）。現地では判官館と俗称し、また衣川館とも呼ばれる。
- ③南部：近代、奥州北側を広く引くくめて南部と称する。源頼朝が奥州を征伐した時、その部下の南部光行に功績があったので、奥州糠南部五つ郡を彼に授けた。したがって、その後、この辺りは南部と言われるようになった。
- ④この高館を守らせた：源義経は忠実かつ勇気がある戦士を選んで、彼らに高館を守らせた。後人からは一瞬の功名だと思われる。
- ⑤兼房：義経が没落した時、老臣増屋十郎兼房は白い髪の様子で死ぬまで戦った（『義経記』）。
- ⑥二堂：中尊寺内の経堂と光堂である。
- ⑦帳を開き仏を拝む儀式：厨子の扉を開いて、中の仏像を信徒に拝見させる。
- ⑧三将：清衡、基衡、秀衡三人の像を指す。実はこの三将の像が存在しないわけである。
- ⑨三尊の仏像：真ん中は阿弥陀如来、左は勢至菩薩、右は観世音菩薩である。
- ⑩光堂：外側に金箔が貼り付けられている。この俳句の意味は、梅雨が降り、景色がぼんやりしているが、光堂はきらきらと金色の光が輝いている。雨は光堂にだけ降らなかっただろう。

②陳岩訳『奥州小路』（1997年12月掲載完了、2011年２月出版）

二八、平泉

三代^①の栄耀一睡の中にして^②、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡^③は田野に成て、金鶏山^④のみ形を残す。先、高館^⑤にのぼれば、北上川^⑥南部より流る、大河也。衣川^⑦は、和泉が城^⑧をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡^⑨は、衣が関^⑩を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと^⑪、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房^⑫みゆる白毛かな 曾良

予て耳驚したる二堂^⑬開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂^⑭は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝^⑮散うせて、珠の屏風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新たに囲て、薨を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

[注解]

①藤原氏三代：指清衡、基衡、秀衡三代。

②借意汉典“黄粱一梦”。

③指秀衡住所。

④金鸡山：位于秀衡馆西北，仿富士山形建造。

⑤高馆：义经居所，传文治五年（1189）遭泰衡攻击时在此自裁。

⑥北上川：经岩手县中部南流，在石卷注入仙台湾的大河。

⑦衣川：经平泉北东流，在高馆北与北上川汇合。北上川支流。

⑧和泉城：秀衡三子和泉三郎忠衡住所。

⑨泰衡遗迹：秀後次子泰衡为源赖朝所迫，违背父亲遗命消灭义经主仆，后受源赖朝攻击，被部下所杀。

⑩衣关：指中尊寺西北的旧关。

⑪为对杜甫《春望》中“国破山河在，城春草木深”的直接引用。

⑫兼房：义经老臣增尾十郎兼房，为义经奋战身亡。

⑬二堂：中尊寺境内的经堂与光堂。

⑭光堂：即金色堂，四壁内外贴金箔，柱梁镶嵌螺钿珠玉，庄严华丽至极。

⑮七宝：佛教中所说七种宝物。

二十八、平泉

藤原氏三代荣华亦不过是南柯一梦。藤原馆正门遗迹距此约八里。秀衡馆迹已荒芜成田野，只有金鸡山仍保留着昔日的姿容。先登源义经之高馆，北上川立即呈现在眼前。此河是从南部地区流来的大河。衣川绕和泉城流淌，在高馆下面汇入北上川。泰衡等旧址以衣关为前沿，紧锁南部入口，似乎为御防虾夷入侵而置。尽管当年那些精良骁勇的将士固守城池，浴血奋战，但亦不过功名一时，现已化作荒草莽莽。此情此景，不禁使人想起“国破山河在，城春草木深”的诗句。铺笠坐于地上，追思良久，悲泪涌流。

昔日动刀兵
功名荣华皆成梦
夏草萋萋生

水晶花开白
犹见兼房乱发摆
催人心生哀 曾良

久负盛名、令人惊叹的二堂今日正逢揭帐拜佛。经堂存有三代将军之像，光堂纳有他们的灵柩，还供有阿弥陀如来等三尊之像。虽然本应七宝散失，珠扉风毁，贴金堂柱为霜雪蚀朽，壁倾堂颓化成荒草丛生的废墟，但由于新建四围，上覆瓦盖，防御风雨，总算使千年前之纪念暂时得以保存。

光堂灿金辉
百年不断五月梅
独不落其内

〈陳岩訳の日本語訳〉

注釈

- ①藤原氏三代とは清衡、基衡、秀衡この三代である。
- ②「黄梁一炊（一睡）」という中国故事の意味を借りる。

- ③秀衡が住んでいた場所を指す。
- ④金鷄山：秀衡館の北西側に位置し、富士山の形をまねて作られた。
- ⑤高館：義経が住んでいた場所であり、文治五年（1189）に泰衡から攻撃されてここで自殺したと言われている。
- ⑥北上川：岩手県の中部を経て南部へ流れて、石巻で仙台湾に注ぎ込む大河だ。
- ⑦衣川：平泉の北側を経て東へ流れ、高館北側で北上川と合流する。北上川の支流である。
- ⑧和泉城：秀衡三男と泉三郎忠衡が住んでいた場所。
- ⑨泰衡遺跡：秀衡次男泰衡が源頼朝に迫られて、父親の遺言に背いて義経主従を殺した。のちに源頼朝の攻撃を受け、部下に殺された。
- ⑩衣関：中尊寺北西側の古い関を指す。
- ⑪杜甫の「春望」の「国破れ、山河在り、城春にして、草木深し」を直接引用した。
- ⑫兼房：義経のために死ぬまで戦った老臣増尾十郎兼房である。
- ⑬二堂：中尊寺内の経堂と光堂である。
- ⑭光堂：すなわち金色堂であり、四つの壁に金箔が貼り付けてあり、柱に螺鈿珠玉が嵌めてあり、きわめて荘厳で華麗である。
- ⑮七宝：仏教で言う七つの宝物である。

二十八、平泉

藤原氏三代の栄華も南柯の一睡に過ぎない。藤原館正門の遺跡はここから約八里のところにある。秀衡館の遺跡は既に荒廃して田野となった。ただ金鷄山だけが昔の姿のままに残っている。まず源義経の高館に登ると、目の前に北上川がすぐに現れた。この川は南部地域から流れてくる大河だ。衣川は和泉城を巡って流れ、高館の下から北上川に流れ込む。泰衡らの旧跡は衣関を最前方として、南部の入り口をしっかりと抑え、蝦夷の侵略を防ぐために置かれたようだ。お城を守るためにとても優れて勇ましい兵士たちが血みどろになって奮戦したが、それも一時の功名に過ぎず、今は荒れた雑草になったのだ。この光景を見て、「国破れて山河在り、城春にして草木深し」の詩を思い出さずにはいられなかった。笠を敷いて座り、物思いに長く耽ると、悲しい涙が湧いてきた。

昔戦争があったが、
その功名と栄華はすべて夢となり、
夏の草が生い茂っている。

水晶の花が白く咲き、
兼房の乱髪が揺れているのを目にしているようだ。
心に悲しみが湧いてきた。

曾良

長い間盛名を負い、人々を驚嘆させる二堂は、今日ちょうど帳を開き仏を拝む。
経堂には三代将軍の像があり、光堂には彼らの霊柩が納めてあり、阿弥陀如来など
三体の像を供えている。本来は七宝が散逸し、珠の扉が風に壊されて、金堂の柱が
霜雪に蝕まれて、壁が傾けて、堂が崩れて雑草が生える廃墟となるはずだったが、
四面に新しく壁を作り、その上に瓦を覆ったので、風雨から守ることができ、千年
前の記念物はなんとかしばらく保存することができた。

しかし
光堂が黄金の輝きを放つ。
百年の間に五月の梅雨は絶えず、
ただその中に落ちないだけ。

③鄭民欽訳『奥州小道』（2002年6月出版）

平泉

三代^①荣华一梦中^②，大门^③遗迹在一里之外。秀衡之遗迹^④已成田野，惟金鸡山^⑤犹存。先
登高馆^⑥，北上川^⑦收入眼底，乃流自南部^⑧之大河。衣川^⑨环绕和泉城^⑩，于高馆下注入大河^⑪。
泰衡^⑫等之遗迹在衣关^⑬之外，似镇固南部门户^⑭以防夷^⑮。择忠臣义士^⑯，据守此城，思功名
显赫，过眼烟云。国破山河在，城春草木青^⑰。不禁铺笠而坐，怀古落泪，不知时光流逝。

夏天草凄凉，
功名昨日古战场，
一枕梦黄梁。

遍地洩疏花，
若见兼房苍白发^⑮。 曾良

久闻二堂^⑰揭帐拜佛^⑱之盛事。经堂^⑲供有三将之像^⑳。光堂^㉑放有三代之棺^㉒，摆置三尊佛像^㉓。七宝^㉔散失，珠门因风雨而损坏，金柱因霜雪而腐朽，既已支离破碎，野草荒芜，却仍四面围垣^㉕，覆盖屋顶，以御风雨，且作千年之纪念也。

梅雨未曾洒光堂，
今日犹辉煌。

①指藤原清衡、基衡、秀衡三代九十六年。

②引用中国黄粱一梦的典故。

③大门，似指平泉馆的南大门。

④指秀衡住宅伽罗御所，平泉馆的主要建筑。

⑤金鸡山，平泉馆西面的小山。秀衡模仿富士山形状建造，山顶上埋有雌雄黄金的鸡以镇护。

⑥高馆，中尊寺东南面的小山。传有源义经宅第遗迹。义经于泰衡进攻时在此自刃。

⑦北上川，发源于北上山脉的姬神岳，流经岩手县、宫城县南下注入石卷湾的奥州第一大河。衣川在平泉附近与北上川汇合。

⑧南部，平泉的北方，以盛冈为中心的南部氏的领地。

⑨衣川，发源于平泉西部的山中，在高馆北面与北上川汇合。

⑩和泉城，传为秀衡的三子和泉三郎忠卫的宅第。

⑪指北上川。

⑫藤原泰衡，秀衡的次子，被源赖朝所迫与源义经作战，但自己也受到源赖朝的攻击。

⑬衣关，中古时期征伐虾夷的据点。在高馆以西约一百米。

⑭从平泉通往南部领地的出入口。

⑮指防御虾夷入侵。

⑯源义经选择忠义之士，弁庆、兼房等皆是为义经殉烈的家臣。

⑰杜甫《春望》：“国破山河在，城春草木深。”

⑱增尾十郎兼房是源义经的老臣，满头白发，拼死奋战，见义经夫妻自刃后，烧毁高馆，自己殉死。洩疏花白，曾良见此，想起兼房的苍苍白发。

- ⑱二堂，中尊寺的经堂和光堂。
- ⑲揭帳拜佛，打开佛龕，供人參拜佛像。
- ⑳藏有一切经一万六千卷等佛经。由清衡建造。建武四年（1337）上层毀于火。
- ㉑三将，指清衡、基衡、秀衡，但经堂里没有他们的塑像，摆放着文殊菩萨、优曇大王、美哉童子之像。
- ㉒光堂，即金色堂。清衡建造，兼具阿弥陀堂与葬堂之意，费时十五年，天治元年（1124）完成。江戸时期才称为光堂。
- ㉓光堂内有须弥坛三个，摆放清衡、基衡、秀衡的棺木。
- ㉔指阿弥陀如来、观音菩萨、势至菩萨。
- ㉕七宝，佛教所说的七种珍宝：金、银、琉璃、玻璃（水晶）、砗磲（车磲）、赤珠、玛瑙。七宝说法不一。《妙法莲华经・普门品》：“为求金银、琉璃、车磲、玛瑙、珊瑚、琥珀、真珠等宝入于大海。”
- ㉖正应元年（1288），镰仓第七代将军惟康亲王奉执权北条贞时之命，建造覆盖光堂的套堂（俗称鞘堂）。

〈鄭民欽訳の日本語訳〉

平泉

三代^①の栄華は一夢の中にあり^②、大門^③の遺跡^④はここから一里のところにある。秀衡の遺跡は既に田野となり、ただ金鶏山^⑤だけがまだ残っている。まず高館^⑥に昇り、北上川^⑦を一望に収めた。それは南部^⑧から流れてくる大河だ。衣川^⑨は和泉城^⑩を廻り、高館の下で大河^⑪へ流れ込む。泰衡^⑫たちの遺跡は衣関^⑬の外にあり、夷族から南部の入り口^⑭をしっかりと守るようだ^⑮。忠臣義士^⑯を選び、この城を守らせた。その赫々たる功名が雲のように過ぎ去ったと思いを馳せた。国破りて山河あり、城春にして草木青し^⑰。思わずに笠を敷いて座ると、昔をしのびながら涙を流して、時の流れていくのを忘れた。

夏の草が寂しくて、
功名は昨日の古い戦場、
一枕にして黄粱の夢を見る。

あたり一面のマルバウツギ、
兼房の白髪が見えるようだ。^⑮ 曾良

二堂^①帳を開き仏を拝む^②盛事は昔から聞いた。経堂^③には三将の像^④が祭られ、光堂^⑤には三代の棺^⑥が置かれ、三尊の仏^⑦がしつらえてある。七宝^⑧が散逸し、珠の扉が風と雨に破られ、金の柱が霜雪によって朽ちる。すでに支離滅裂で、野草が荒れ果てたが、まだ四面から壁を囲み^⑨、瓦を覆って雨風を防ぐ（ようにしてある）、とりあえず千秋を思う記念にしている。

光堂は未だに梅雨に降り注がれることなく、
今日に至ってもなお輝いている。

- ①藤原清衡、基衡、秀衡の三代の九十六年間を指す。
- ②中国の「黄梁一炊（一睡）」の典故から引用した。
- ③大門は平泉館の南大門を指すようである。
- ④秀衡の居館伽羅御所をさす。平泉館の主な建物である。
- ⑤金鶏山は平泉館の西側の小さい山である。秀衡は富士山の形状をまねて作った。鎮護するため山頂にオスとメスの金色の鶏を埋めた。
- ⑥高館は中尊寺の東南側の小さな山である。源義経の居館の遺跡があると伝わる。義経は泰衡が攻撃した時ここで自殺した。
- ⑦北上川は北上山脈の姫神岳に源を発し、岩手県、宮城県を流れ、石巻湾に注ぐ奥州の第一の川である。衣川は平泉のあたりで北上川と合流した。
- ⑧南部は平泉の北方であり、盛岡を中心とする南部氏の領地である。
- ⑨衣川は平泉西方の山に源を発し、高館の北側で北上川と合流した。
- ⑩和泉城は秀衡三男と泉三郎忠衛の居館である。
- ⑪北上川を指す。
- ⑫藤原泰衡は秀衡の次男であり、源頼朝に迫られ、源義経と戦ったが、自分も源頼朝からの攻撃を受けた。
- ⑬衣関とは中古時代に蝦夷地を討伐する拠点であり、高館から西側の約百メートルにある。
- ⑭平泉から南部領地への出入口である。
- ⑮蝦夷の侵入を防ぐことを指す。

- ①⑥源義経が選択した忠義の士である弁慶、兼房などはいずれも義経のために犠牲した家臣である。
- ①⑦杜甫の「春望」：「国破山河在、城春草木深。」
- ①⑧増尾十郎兼房は源義経の家臣であり、年寄りで白髪ばかりであったが、死ぬまで戦って、義経夫婦が自殺したのを見た後、高館に火を付けて、自分も殉死した。曾良はこの景色を見て、兼房の白髪を思い出した。
- ①⑨二堂は中尊寺の経堂と光堂である。
- ②⑩帳を開き仏を拝むとは厨子の扉を開いて、人々に仏像を拝見させることである。
- ②⑪一万六千巻の一切経の経書を保管していた。清衡によって建てられたが、建武四年（1337）に上の層が火事で無くなった。
- ②⑫三将は清衡、基衡、秀衡を指す。しかし経堂にはかれらの像がなく、文殊菩薩像、脇侍優天王、善経童子が置かれていた。
- ②⑬光堂、すなわち金色堂である。清衡によって建てられ、阿弥陀堂と墳墓堂としての二つの機能を兼ねている。十五年間をかけて、天治元年（1124）に完成した。江戸時代になってようやく光堂と呼ばれた。
- ②⑭光堂内には三つの須弥壇があり、清衡、基衡、秀衡の棺が置かれている。
- ②⑮観世音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来を指す。
- ②⑯七宝は仏教に言われた金、銀、瑠璃、玻璃、しゃこ、珊瑚、瑪瑙この七つの宝である。七宝に関する言い方は色々あり、『妙法蓮華経・普門品』の記載によると、「金、銀、瑠璃、玻璃、しゃこ、珊瑚、瑪瑙、真珠などの宝を探すために海に入った」と。
- ②⑰正応元年（1288）、鎌倉第七代将軍惟康親王は執政北条貞時の命令により、光堂を覆う堂を作り建てた（通称は「鞘堂」である）。

④陳徳文訳『奥州小道』（2008年9月出版）

（二十八）

三代榮耀^①于一睡之中。大門遺迹，位于此側一里之遙。秀衡之旧居，已成田野，唯金鶏山^②尚存昔日之残形。登高館^③望之，北上川乃自南向北流去大河也。衣川^④环绕和泉城，向下奔入此大河。泰衡^⑤等旧迹，隔衣关紧锁南部口，以防夷狄也。聚忠义之臣，坚守此城，

千秋功名，化为一时碧草。国破山河在，城春草木深。脱笠而坐，不觉潸然泪下，久久不忍离去。

夏草扶疏，将兵残梦难寻觅。

水晶花白，忽忆兼房^⑥发如雪。 曾良

二堂开张，久有所闻。经堂存三将之像^⑦光堂纳三代之棺，安置三尊之佛^⑧。七宝散失，珠扉为风所破，金柱朽如霜雪。本应早已颓废空虚、为荒草掩埋之地，而今四面新筑围圩，覆之瓦甍以避风雨，暂为千秋之纪念矣。

五月雨骤，光堂依稀留旧彩。

①指藤原清衡、基衡、秀衡三代。

②秀衡仿富士筑山埋黄金鸡，用以守护平泉之山。

③秀衡第三子和泉三郎忠衡之居馆。

④北上川支流。

⑤泰衡，秀稀次子，后为源赖朝所杀。

⑥恭房为义经之妻身边一老臣，即十郎权头兼房，义经居高馆而死时，他亦奋战身亡。

⑦指藤原清衡、基衡、秀衡像。实际上保留的是文殊菩萨、优曇大王、善财童子三尊像。

⑧阿弥陀如来、观世音菩萨和势至菩萨。

〈陳徳文訳の日本語訳〉

三代の栄光^①も一睡の中に。大門の遺跡はこの側から一里離れる所に位置する。秀衡の旧居は既に田野となり、ただ金鶏山^②だけが昔の形のままだに残っている。高館^③に登って眺めると、北上川は南より北へ流れてゆく川だ。衣川^④は和泉城を囲み、下へ向かって大河へ流れる。泰衡^⑤などの旧跡は衣関を隔てて南部の口をしっかりと封鎖し、それを以って夷狄を防ごうとした。忠義の臣下を集め、この城をしっかりと守っていたが、千秋の功名は一時の青い草となった。国破りて山河在り、城春にして草木深し。笠をぬいて座ったら、涙が思わずに零れ、長い間離れることができなかった。

夏草はよく茂り、将兵の夢の跡は探しがたい。

水晶の花が白く、たちまち兼房^⑥の髪が雪のごときことを思い出す。曾良

二堂の開帳は昔から聞いていた。経堂には三将^⑦の像が保存され、光堂には三代の棺が納められ、三尊の仏^⑧が安置されている。七宝が散逸し、珠玉の扉は風に破られ、金の柱は朽ちて霜雪のようになった。とくに廃れて虚しくなり、荒れた草に覆われるはずのところは、今は新しく建てた壁で四面を囲み、その上に瓦を覆って雨風を防ぐ（ようにしてある）。とりあえず千秋の記念となるだろう。

五月に雨が急いで（降り注ぎ）、光堂は依然として昔の風采が残っている。

- ①藤原清衡、基衡、秀衡の三代を指す。
- ②秀衡は富士の形をまねて山を作り、黄金の鶏を埋めて、それでこの平泉の山を守る。
- ③秀衡の第三子と泉三郎忠衡の居館。
- ④北上川の支流。
- ⑤泰衡とは、秀稀の次子であり、後に源頼朝に殺された。
- ⑥恭房とは、義経の妻に仕えていた老臣の一人であり、つまり十郎権頭兼房である。義経が高館に住んでいて死んだ時、彼も奮戦して死んだ。
- ⑦藤原清衡、基衡、秀衡の像を指す。実際、保存されたのは文殊菩薩、優曇大王、善財童子の三尊像である。
- ⑧阿弥陀如来、観世音菩薩と勢至菩薩。

⑤鄭清茂訳『奥之細道』（2011年1月出版）

平泉

三代榮耀一睡中^①，大門舊址在此一里之外^②。秀衡遺跡，已成田野^③，唯金雞山舊態依然^④。先登高館遠眺^⑤，北上川，大河也^⑥，自南部流來^⑦。衣川迴繞和泉城^⑧，於高館下匯入大河。泰衡等屯堡舊跡^⑨，隔在衣關之外^⑩，形似堅守南部門戶，以防蝦夷之入侵者^⑪。噫，遙想當年，聚忠義之臣，困守此城之中^⑫。爭功名於一時，終歸化為草叢。國破山河在，城春草自青^⑬。

鋪笠而坐，潸然淚下^⑭，不知時之推移。

夏草萋萋
將士用命求仁
夢幻一場^⑮

水晶花裡
兼房容顏宛在
白髮蒼蒼^⑯
曾良

耳聞二堂^⑰，驚歎久矣，正逢開龕^⑱。經堂存三將之像^⑲，光堂納三代之棺^⑳，安三尊之佛^㉑。七寶散逸^㉒，風破珠扉，雪腐金柱；頽廢為墟，幾成叢莽。乃於四圍新築罩堂，覆瓦以蔽風雨^㉓，暫保千載須臾之遺物^㉔。

五月梅雨
難道有意避開
光堂無恙^㉕

①《隨行日記》五月十二日（陽曆六月廿八日）：「陰。離戶今。……黃昏抵一關。宿。」十三日：「天晴。巳刻（離一關）往平泉……見高館、衣川、衣關、中尊寺、光堂（金色寺）、泉城、櫻川、櫻山、秀衡居館等。……見月山、白山。經堂因別當不在，不開。見金雞山。見新御堂、無量劫院跡。申上刻歸（一關）。宿。」十四日：「天晴，離一關。」可見芭蕉不但未住平泉，而在平泉參觀時間亦僅有數小時。如此多項重要古蹟景點，難免有走馬看花之嫌。

所謂「三代」，指奧州藤原氏清衡、基衡、秀衡三代。首代清衡（一〇五六？——一一二八），平安後期東北豪族，於寬治三年（一〇八九）拜陸奥押領使，領有奥羽六郡（伊澤、江刺、加賀、稗拔、志波、岩手），成為獨霸一方之權貴。嘉保元年（一〇九四）將其居館自江刺郡豐田移至岩手郡平泉。天治三年（一一二六）建立中尊寺，開啟平泉文化之序幕。二代基衡（一一〇六？——一一五七）擴建毛越寺，造金堂與淨土庭園大泉池。三代秀衡（一一二二？——一一八七）繼父祖之業克紹箕裘，完成毛越寺，又建無量光院；並任鎮守將軍、陸奥守，君臨奥羽之地。三代榮耀長達約一百年。

- 「一睡中」，典出唐沈既濟撰〈枕中記〉，敘盧生在邯鄲客舍遇道士呂翁，臥其所授之枕入夢，歷盡富貴榮華。醒後見主人蒸黍未熟，因悟人生如夢、諸事無常之理。即所謂「黃粱夢」也。「一睡」應作「一炊」，日文二詞讀音同（いつする），混用已久，積非成是矣。
- ②「大門」應指藤原三代官廳平泉館之正門。但芭蕉所言，恐非此「大門舊址」。或以為毛越寺南大門；或以為金澤（加澤）村南大門。諸說紛紜，迄無定論。
- ③「秀衡遺跡」指其居館遺址，又稱嘉樂館或伽羅御所。《聞老志》：「嘉樂館址，其地在新御堂來神河（北上川）西，高館東北，秀衡常居也。」《平泉舊蹟志》（一七六〇）：「今成田野。」而《聞老志》則均以「今盡荒廢」形容平泉館與無量光院遺址。〈古詩十九首〉：「出郭門直視，但見丘與墳。古墓犁為田，松柏摧為薪。」
- ④「金雞山」：在平泉館西，傳秀衡於山頂埋金雞，以為平泉鎮護。《聞老志》：「中尊寺東南有高峰，秀衡擬之酸州慈峰（富士山），且埋一金雞於峰頭，號金雞山。」劉禹錫〈西塞山〉：「人世幾回傷往事，山形依舊枕寒流。」
- ⑤「高館」，在中尊寺東方之營砦，面臨北上川，背倚山丘。源義經自殺之地。《聞老志》：「衣河館，今曰高館，在平泉村之東。安倍賴時（？一一〇五七）所築，謂之衣河館。文治中（一一八五一 一一九〇），民部少輔基成居此館。義經自殺於茲。世稱高館是也。上有義經古墳，墳畔有一櫻樹，今猶存。是乃往時舊物也。傍有兼房墓。天和中（一六八一—一六八四），我前太守（伊達）綱村君，建祠堂祭義經幽魂。」
- ⑥「北上川」，一作「來神河」，訓讀同（きたかみがは）。發源於岩手縣北境姬神岳，南流經岩手縣中央、宮城縣東北，至平泉與衣川合流，注入石卷灣。全長約三百六十公里。《聞老志》：「櫻川，來神河流過平泉館下之川也。往時，繞駒形山下。每春艷陽時，櫻花一萬株，峰頂爛熳。風光漸去，飄零日飛，此時滿川如雪，河流變色。因稱之櫻川。如今其地為野田，尤為可惜。」
- ⑦「南部」指平泉北方，南部氏（十萬石）之領地。在此則泛指北上川上游，以城下町盛岡為中心之北方地區。
- ⑧「衣川」，源出平泉西方山中，東流至平泉之北匯入北上川。其匯流點，往昔在東稻山麓，而芭蕉當時則已移至高館之北約兩百公尺處矣。歌枕。源重之（？一一〇〇〇），平安中期歌人：「衣川送客尋常事，浪打離人袖口濕」（衣川 みなれし人の 別れには 袂までこそ 波は立ちけれ）（《新古今集》別）。「和泉城」，指藤原秀衡三男和泉三郎忠衡之居館。《聞老志》：「和泉城遺址。在中尊寺西，阻衣川。……按：此城去高館以西可十町。……文治中（一一八五一 一一九〇），忠衡居之。同五年夏六月廿二日自殺。先義經自盡已五十二日。」《平泉舊蹟志》：「三男泉三郎忠衡居館，云在泉屋之東。其處今無知之者。」有關和泉三郎，請參〈二〇、鹽竈明神〉及其注⑦—⑩。

- ⑨藤原泰衡（一一五五—一一八九）：秀衡二男，通稱伊達次郎。父秀衡去世後，繼承出羽陸奥押領使之職，管領六郡。後為形勢所逼，不得不違背亡父遺囑，歸附源賴朝，於文治五年（一一八九）閏四月三十日，夜襲義經於衣川館。但隨後賴朝即以藤原家曾經庇護義經為由，大舉追殺。同年九月三日，不敵而死，年三十五。案：《細道》原文所謂「泰衡等舊跡」，究在何處，注家或付諸闕如，或各立異說，迄無共識。唯視其文脈，又有「泰衡等」之複數助詞，或即指泰衡麾下照井太郎、秋田三郎、赤田次郎等在衣關之北、衣川之西所設之營砦，故且以「泰衡等屯堡舊跡」譯之。
- ⑩「衣關」：衣川關之略。始設於八世紀末，以為征討蝦夷之基地。至十一世紀初，平安後期，陸奥豪族安倍賴時（？—一〇五七）重新修築。《聞老志》：「去高館一町餘，山下有小關路，是古關門之址也。」歌枕。和泉式部：「千端萬緒疊成堆，徒聞陸奥有衣關」（もろともに たたまし物を みちのくの 衣の關を よそに聞くかな）（《詞花集》別）。
- ⑪原文作「夷」，即「蝦夷」（えぞ，又讀 えみす或えびす）。Aini（アイヌ）之漢化稱呼。指古代散居日本東北及北海道之民族，平安後期藤原氏所領奥州六郡（見注①），即為降順蝦夷族群定居地區。
- ⑫「此城」指「高館」，或以為「平泉城」，恐非是。據《義經記》所載，困守城中之「義臣」，有武藏坊弁慶、片岡八郎、鈴木三郎、龜井六郎、鷹尾三郎、増尾十郎、伊勢三郎、備前平四郎等所謂「八騎」，加上十郎權頭兼房與喜三太，一共十人。
- ⑬杜甫〈春望〉：「國破山河在，城春草木深。感時花濺淚，恨別鳥驚心。」湖伯雨〈望淮〉：「春風何處無生意，白骨城邊草自青。」（尾行仂，《評釋》，引自天隱龍澤編，《錦繡段》遊覽）。
- ⑭杜甫〈玉華宮〉：「憂來藉草坐，浩歌淚盈把。」
- ⑮原文：「夏草や 兵どもが 夢の跡」《詩經·黍離》：「彼黍離離，彼稷之苗。行邁靡靡，中心搖搖。知我者，謂我心憂，不知我者，謂我何求。」王昌齡〈塞下曲〉：「昔日長城戰，咸言義氣高。黃塵足千古，白骨亂蓬蒿。」徐道暉〈題釣臺〉：「此地也成空，草木多年換。」（《瀛奎律髓》懷古）。
- ⑯原文：「卯の花に 兼房みゆる 白毛かな」「兼房」即十郎權頭兼房。案：「權頭」謂編制外臨時官員之長。據《義經記》，兼房為大納言平時忠（一一二七一—一一八九）女兒之「乳人」（監護人），女兒嫁與源義經時，兼房隨往而成義經家臣。義經流亡平泉，高館之役，兼房目睹義經夫婦自殺後，放火館舍，擊倒敵將長崎太郎，挾其弟長崎二郎跳入火焰中，壯烈犧牲。
- ⑰「二堂」指中尊寺之經堂與光堂（金堂）。芭蕉訪問中尊寺時，除二堂之外，尚有鐘樓、開山堂與藥師堂，至於《吾妻鏡》所謂「寺塔四十、僧房三百」，則已不復存在矣。

- ⑮「開龕」，原文作「開帳」，定期掀開神龕帷帳，以便信眾禮拜也。
- ⑯「經堂」，即經藏。藤原清衡所建兩層樓房，經十三年而後成（一一二二），並納紺紙金銀交書一切經五千三百餘卷；二代基衡納紺紙金字千部一日經；三代秀衡納金紙金字一切經五千三百餘卷，總共一萬六千餘卷。《聞老志》：「經藏堂，在光堂西北。今謂之經堂。構八架，置三代所奉納一切經。」惜於建武四年（一三三七）上層火災，僅存下層云。
- 「三將之像」指前舉藤原清衡、基衡、秀衡三代。但經堂並無「三將之像」。堂中八角須彌壇上，供有本尊文殊菩薩、脇士優天王與善財童子；背後安置佛陀婆利三藏與婆藪仙。據前舉《隨行日記》，當日因別當不在，經堂並未開放參觀。故芭蕉所謂「三將之像」，注家或以為又屬芭蕉之虛構，或以為因誤聽或誤記「三將之經」而來。
- ⑰「光堂」即「金色堂」。中尊寺別院，有阿彌陀佛堂，附以葬堂。藤原清衡所建，歷十五年而成（一一二四）。《吾妻鏡》：「上下四壁內殿皆金色。」《聞老志》：「按：金色堂，如今土人所謂光堂者是也。」「三代之棺」指收藏清衡、基衡、秀衡三代遺體之棺。《聞老志》：「堂內盡金色，中構三壇，上各置佛像，壇下皆三代之屍也。左壇乃座基衡，右座秀衡，前壇清衡也。」
- ⑱「三尊之佛」謂阿彌陀三尊。阿彌陀如來居中，左觀世音菩薩，右勢至菩薩。據《聞老志》：「壇上佛像，中立者彌陀，……觀音、勢至，相並其前。多聞、持國兩立，六地藏擁後。」可見光堂中所安佛像，不止「三尊」而已。
- ⑲佛家「七寶」，有不同說法。據《阿彌陀經》，則指金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲、赤珠、瑪瑙等七物。光堂須彌壇四隅，金柱珠扉，七寶莊嚴，但年久失修，風吹雨淋雪蝕，故不免「七寶散逸」也。
- ⑳藤原氏滅亡後，中尊寺日漸荒廢。過一百六十多年至鎌倉末期，正應元年（一二八八）執權北條貞時與前武藏守北條宣時，奉征夷大將軍惟康親王之命，建造寶字形「罩堂」（日文稱為「覆堂」、「套堂」或「鞘堂」），五間（九・一公尺）見方，團團包圍覆蓋光堂。其後，室町時代元中元年（一三八四）重葺屋頂。降至江戶時代，伊達政宗又加整修之後，即歸仙台歷代藩主保護之下。
- ㉑「須臾」，原文「暫時」，即佛家所謂「剎那」（Ksana）。人世千載，雖云長久，然較之時間之永恆，不免短暫無常，千載遺物終將歸於虛幻。
- ㉒原文：「五月雨の 降のこしてや 光堂」此句初稿：「五月雨や 年年降りて 五百たび」（五月梅雨 年年按時降臨 已五百次）。

〈鄭清茂訳の日本語訳〉

鄭清茂は『随行日記』や『聞老志』などの記述を中国語に訳して引用しているので、その原文をゴシック体で各注の後ろに添付する。

平泉

三代の栄耀は一睡の中にして^①、大門の旧跡はここから一里にある^②。秀衡の遺跡は田野^③になり、ただ金鶏山は昔のままに依然としている^④。まず高館に昇って眺めると^⑤、北上川^⑥は、大河であり、南部^⑦から流れてきた。衣川は和泉城を廻り^⑧、高館の下に大河へ流れ込む。泰衡等のお城の旧跡は^⑨、衣関の外に隔てて^⑩、南部をしっかりと守るような形をして、それで蝦夷の侵略者^⑪を防いでいた。ああ、はるかの昔を思うと、忠義の臣が集まり、この城の中に立てこもっていた^⑫。一時功名を争ったが、結局草むらと化した。国破りて山河あり、城春にして草青し^⑬。笠を敷いて座ると、さめざめと泣いてしまい^⑭、時の推移を知らなくなった。

夏の草は生い茂り

兵士たちは命を用いて仁を求めようとした

夢幻一回にすぎない^⑮

水晶の花に

兼房の容貌がまるであるように

真っ白な白髪^⑯

曾良

昔から二堂の名を聞いて^⑰驚嘆したが、ちょうど（このごろは）開帳することに偶然に会った^⑱。経堂には三将の像が保存され^⑲、光堂には三代の棺が納めており^⑳、三尊の仏が置かれている^㉑。七宝が散逸し^㉒、珠の扉が風に破られ、金の柱が雪に朽ちた。廢れて廢墟になり、叢になりそうだった。そこで四面から單堂を新しく作り、瓦をかぶせて雨風を防ぎ^㉓、しばらくこの千載が一瞬のごときの遺物を保存することができた^㉔。

五月の梅雨は、
まさかわざと避けたのだろうか。
光堂は無事のままである^⑤。

注釈：

- ①『随行日記』五月十二日（陽暦六月廿八日）：天気曇り、今戸から離れ……黄昏に一関に着いた後、寝た。十三日：天気晴れ、午後に一関から平泉へ行った……高館、衣川、衣関、中尊寺、金色寺、泉城、櫻川、櫻山、秀衡の居館などを見た。……月山、白山も見た。経堂には別當がいなかったため、見えなかった。金鶏山、新御堂、無量劫院の遺跡を見た。午後（3～5時）ぐらい一関に戻って寝た。十四日：天気晴れ、一関から離れた。

このように、松尾芭蕉は平泉で住んでいなかっただけでなく、平泉で観光する時間さえも数時間しかなかった。こんなにたくさん名所旧跡があるのに、おそらく駆け足で見ていただけたらう。

〔『随行日記』原文：十二日：曇。戸今を立。……黄昏ニ着。合羽モトヲル也。宿ス。十三日：天気明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。……高館・衣川・衣ノ関・中尊寺・光堂（金色寺、別当案内）・泉城・さくら川・さくら山・秀平（衡）やしき等ヲ見ル。……月山・白山ヲ見ル。経堂ハ別当留守ニテ不開。金鶏山見ル。シミシ（新御）堂、无量劫院跡見。申ノ上尅帰ル。……宿ス。十四日：天気吉。一ノ関ヲ立。〕

「三代」とは、奥州藤原氏の清衡、基衡、秀衡この三代である。一代目の清衡（一〇五六？—一一二八）は、平安時代後期の東北の豪族であり、寛治三年（一〇八九）に陸奥国の押領使となり、奥羽の六郡（伊澤、江刺、加賀、稗拔、志波、岩手）を所有し、一地方を独占する有力者になった。嘉保元年（一〇九四）に居館を江刺郡豊田から岩手郡平泉に移した。天治三年（1126）に、中尊寺を建設し、平泉文化の序幕を開いた。二代目の基衡（一一〇六？—一一五七）は毛越寺を増築し、金堂及び浄土式庭園の大泉池を造った。三代目の秀衡（一一二二？—一一八七）は祖父の業に継ぎ、毛越寺の建設を完了させ、また、無量光院を建設した。そして、鎮守府將軍と陸奥国の国司を兼任し、奥六郡の主となった。三代の栄光は約百年続てい

た。

「一睡中」は唐代の沈既済が書いていた「枕中記」から出た物語である。盧生という人が邯鄲の旅館で呂翁という道士に会った。道士からもらった枕で寝ると、栄華を極めた生涯の夢を見た。目を覚めた後、旅館の主人が炊いていた玉蜀黍がまだ炊き上がっていなかったのを見て、人生は夢のように、世の中の事が予測できないと悟った、ということを語った。即ち黄粱一炊の夢である。「一睡」は「一炊」とすべきだが、日本語では発音が同じ（いつすゐ）なので、混用してしまい、誤記のほうが長年使われてきた。

- ②「大門」は藤原三代の官庁平泉館の正門だと思いますが、松尾芭蕉が言ったのはおそらくこの正門の遺跡ではない。毛越寺の南正門と言うのもあれば、金沢（加沢）村の南正門と言うものもある。諸説入り乱れていて、どちらが正しいか今だに定説がない。

- ③「秀衡遺跡」とはその居館の遺跡であり、また嘉楽館あるいは伽羅館ともいう。『聞老志』には「嘉楽館旧跡がその新御堂来神川（北上川）の西方、高館の東北にあり、秀樹のいつも住んでいたところだ」と記載されている。

『平泉旧蹟志』（一七六〇）は、「この場所、今は田野になった」と書いている。『聞老志』では皆「今儘荒廢」という表現で平泉館と無量光院の遺跡を表現している。「古詩十九首」には、「出郭門直視、但見丘與墳。古墓犁為田、松柏摧為薪。」とある。

〔『聞老志』：其地在新御堂来神河西高館東北秀衡常居也〕

〔『平泉旧蹟志』：今田圃となり〕

〔『聞老志』：平泉館址在平泉村中新御堂西高館南今尽荒廢己為墟 / 無量光院址在高館東南曰之新御堂今尽荒廢旧礎猶存往時大日像今移之中尊寺〕

- ④「金鶏山」は、平泉館の西側にある。秀衡が平泉を鎮護するために山頂に金の鶏を埋めたと伝わる。『聞老志』には、「中尊寺の東南側に高い峰があり、秀衡はそれを駿州慈峰（富士山）になぞらえる。そして、山頂に金の鶏が埋められたことによって、金鶏山と呼ぶ」と。劉禹錫の「西塞山」には、「人世幾回傷往事、山形依舊枕寒流」とある。

〔『聞老志』：中尊寺東南有高峯秀衡擬之駿州慈峯且埋金鶏一匹於峯頭号金鶏〕

山乃是地也〕

- ⑤「高館」は中尊寺の東方に位置する砦であり、北上川に臨み、後ろに丘がある。源義経が自殺した場所である。『聞老志』には、「衣河館は今の高館であり、平泉村の東方にある。阿倍頼時（?～一〇五七）が建設し、衣河館と言う。文治（1185～1190年）に民部少輔基成が居館に住んでいた。義経もここで自殺した。世の中では高館と呼ばれる。上に義経の古墳があり、古墳の隣に桜の木があり、今も立っている。これは昔の古い物であり、隣に兼房のお墓がある。天和中年（一六八一―一六八四）、我前藩主の〔伊達〕綱村公が、義経の祭祀するために祠堂を建設した」と書かれている。

〔『聞老志』：衣河館在平泉村東安倍頼時所築曰之衣河館文治中民部少輔基成居此館義経自殺于茲世称高館是也上有義経古墳々畔有一櫻樹今猶存焉是乃往時之旧物也傍有兼房墓天和中我前大守綱村君建祠堂祭義経幽魂〕

- ⑥「北上川」、また「来神河」という名があり、両者の訓読み（きたかみかは）は同じである。岩手県北側の姫神岳に源を発し、南へ岩手県の中央部、宮城県の東北を流れて、平泉で衣川と合流して石巻湾に注ぐ。全長約三百六十四キロである。『聞老志』には、桜川は来神河から平泉館の下川へ流れ、以前、駒形山を回り、春になると、一万本の桜が山頂まで咲いており、風が吹くと、桜が落ちふれ、この時、川が雪のように見られ、流れの色が変わってしまう。そのため、桜川と呼ばれた。今は野田になって、とても残念だった」と書かれている。

〔『聞老志』：櫻川来神河流過平泉館下川也往時遠駒形山下每春艷陽之時櫻花一萬株爛慢于峯頂風光漸去飄零日飛此時滿川如雪河流変色仍称之櫻川如今其地為野田尤可慳〕

- ⑦「南部」は平泉の北方であり、南部氏（十万石）の領地である。ここでは北上川の上流、城下町盛岡を中心とする北方の地域を指す。
- ⑧「衣川」は平泉西側の山に源を発し、東へ流れて、平泉の北で北上川に注ぎ込む。その合流点は、昔は東稲山にあるが、芭蕉の時はすでに高館より北へ

の約二百キロの場所に移った。歌枕である。源重之（？～一〇〇〇）は平安中期の歌人で、「衣川はいつもお客を見送る。離人の袖は波をかぶって濡れてしまう（衣川 みなれし人の 別れには 袂までこそ 波は立ちけれ）（『新古今集』別）」という歌を詠んだ。

「和泉城」とは藤原秀衡三男と泉三郎中衡の居館である。『聞老志』には、「和泉城の遺跡である。中尊寺の西側に位置していて、衣川によって隔てられる。……思うには、この城から高館の西までは十町がある。……文治（一一八五—一一九〇）、忠衡がここに住んでいた。同五年、夏の六月十二日に自殺した。義経の自殺より五十二日早かった」と。『平泉旧蹟志』には、三男泉三郎忠衡の居館は泉屋の東に位置するといわれたが、その居館は今どこであるかが知る人がいないと書かれている。泉三郎に関する情報は「二〇、鹽竈明神」及びその注釈⑦～⑩をご参照。

〔『聞老志』：遺址在中尊寺西阻衣川……按此城去高館以西可十町康平中号琵琶柵文治中忠衡居之同五年夏六月廿二日自殺先義経自尽己五十日

〔『平泉旧蹟志』：忠衡第旧趾詳ならず、三男泉三郎忠衡の居所なり（東鑑に此居所泉屋の東にありといへり、按するに彼の酒泉の辺を泉屋と云うか、若然らば平泉館に属せるなるべし、一説に琵琶の柵即ち泉城にして此に住すといへり）〕

- ⑨藤原泰衡（一一五五—一一八九）は秀衡の次男、通称伊達次郎である。父の秀衡が亡くなった後、出羽陸奥押領使を継ぎ、六郡を管理していた。のちに当時の政治情勢に迫いたてられて、父の遺言に背いて源頼朝に帰順した。文治五年（一一八九）閏四月三十日に衣川館にいる義経を夜襲した。しかし、頼朝は藤原氏が義経を庇護したことを理由にして、泰衡に追い打ちをかけた。同年九月三日に、泰衡が敵わず亡くなり、享年三十五歳であった。私が思うには、「細道」の原文は、「泰衡等が旧跡」と書いていたが、一体どこにあるのかについて、各注釈は解釈を付けなかったり、それぞれの説を立てたりして、今だに統一してない。その文脈を見ると、「泰衡等が旧跡」には複数の助詞があるため、泰衡の部下である照井太郎、秋田三郎、赤田次郎などが衣川の北方、衣川の西方に設けていた砦を指しているかもしれないので、「泰衡等のお城の旧跡」に翻訳した。

- ⑩「衣関」とは衣川関の省略である。八世紀末に蝦夷地を征する本拠地とするために建設し始めた。十一世紀初期の平安後期になると、陸奥の豪族安倍頼時（?—一〇五七）が修繕した。『聞老志』には、「高館から一町余り行くと、山の下には細い関の道がある。ここは昔の関門の遺跡だ」と記載されている。和泉式部は「考えや物事が雑然として、ただひたすら陸奥に衣が関がると聞いた（もろともに たたまし物を みちのくの 衣の関を よそに聞くかな）（『詞花集』別）」と詠んだ。

〔『聞老志』：去高館一町余山下有小関路是古関門之址〕

- ⑪原文は「夷」、即ち「蝦夷」（えぞ、またはえみすもしくはえびすと読む）。アイヌ民族の漢化した呼び方である。古代東北及び北海道で散居している民族である。平安後期藤原氏が所有した陸奥六郡^{（注釈①）}、即ち、帰順した蝦夷民族が住んでいた地域である。
- ⑫「此城」とは「高館」を指す。または「平泉城」を指しているとも言われるが、おそらくそうではない。『義経記』の記載によると、城に立て籠もった「義臣」は、武藏坊弁慶、片岡八郎、鈴木三郎、亀井六郎、鷹尾三郎、増尾十郎、伊勢三郎、備前平四郎など、いわゆる「八騎」であり、さらに上十郎権頭兼房及び喜三太を加えて、合計十人がいる。
- ⑬杜甫の「春望」：「国破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。」湖伯雨の「望淮」：「春風何處無生意、白骨城邊草自青。」（尾行仝、『評釋』、天隱龍澤編『錦繡段』「遊覽」による引用）。
- ⑭杜甫「玉華宮」：「憂來藉草坐、浩歌淚盈把。」
- ⑮原文：「夏草や 兵どもが 夢の迹」。『詩經・黍離』：「彼黍離離、彼稷之苗。行邁靡靡、中心摇摇。知我者、謂我心憂、不知我者、謂我何求。」王昌齡「昔日長城戰、咸言義氣高。黃塵足千古、白骨亂蓬蒿。」徐道暉「題釣台」：「此地也成空、草木多年換。」（《瀛奎律髓》懷古）。
- ⑯原文：「卯の花に 兼房みゆる 白毛かな」。「兼房」は、すなわち十郎権頭兼房である。私が思うには、「権頭」は編制外の臨時官吏での長官である。『義経記』によると、兼房は大納言平時忠（一一二七—一一八九）の娘の「乳人」（保護者）であり、娘を源義経に嫁がせた時、兼房も一緒に付いて行って義経の家臣になった。義経が平泉に流亡し、高館の戦いの後、兼房が

義経夫婦の自殺を見て館舎に火をつけた。そして、敵将長崎太郎を倒して、その弟長崎二郎を捕まえて彼と一緒に大火に飛び込んで犠牲した。

- ⑰「二堂」は中尊寺の経堂と光堂（金堂）である。芭蕉が中尊寺に訪れた時、二堂のほかに、鐘撞堂、開山堂、薬師堂がまだあった。『吾妻鏡』に記載された「寺塔四十、僧房三百」というのは、もう存在していなかった。

〔『吾妻鏡』：寺塔四十余宇。禅坊三百余宇也。〕

- ⑱「開龕」、原文は「開帳」である。安置する信徒たちに拝見させるために、定期的に厨子の扉を開いていた。

- ⑲「経堂」、すなわち「経蔵」である。藤原清衡が建設した二階の建物で、十三年間をかけて完成し（一一二二）、五千三百余巻の紺紙金銀交書一切経を納め、二代の基衡が千部の紺紙金字一日経を納め、三代秀衡が五千三百巻の紺紙金字一切経を納めたので、合計一万六千あまりの経書がある。『聞老志』には、「経蔵堂は光堂の北西に位置し、現在は経堂と呼ばれる。八つの棚を備えて、三代が納めた経書を全部置いた」とある。惜しいことに、建武四年（一三三七）に、上の層は火事があったため、現在下の層だけ残っているという。

「三将の像」は前述した藤原清衡、基衡、秀衡三代を指す。しかし、経堂には「三将の像」がない。堂中の八角須弥壇の上に、本尊文殊菩薩像、脇侍優天王、善財童子を祭っている。裏側には、仏陀波利三蔵と頗梨采女が置かれている。上記『随行日記』（注釈①）によると、当日別當がいなかったため、ここは公開しておらず、観光できなかった。そのため、芭蕉が言う「三将の像」は、芭蕉が虚構したもの、あるいは「三将の経」の誤記や聞き間違いだと諸注釈が言っている。

〔『聞老志』：在光堂西北今日之経堂構八架置三代所寄附一切経也〕

- ⑳「光堂」は、すなわち「金色堂」である。中尊寺の別院には阿弥陀仏堂があり、墳墓堂も付いている。藤原清衡が建設し、十五年間をかけて完成した（一一二四）。『吾妻鏡』には、「上下四つの壁と内殿はすべて金色だ」と書いていた。『聞老志』：「思うには、金色堂は現在の言われる光堂であ

る。」「三代の棺」とは清衡、基衡、秀衡三代の遺体を納めた棺である。

『聞老志』：「堂内すべて金色であり、中には三つの壇を備え、それぞれの上に仏像を設置し、下は全部三代の死体である。左壇は基衡、右壇は秀衡、前壇は清衡である。」

〔『吾妻鏡』：上下四壁内殿皆金色也。〕

〔『聞老志』：按金色堂如今土人所謂光堂者是也〕

〔『聞老志』：堂内尽金色中構三壇各上置仏像壇下皆三代之屍也左壇乃痊基衡右痊秀衡前壇清衡也〕

- ②①「三尊の像」とは阿弥陀三像である。真ん中は阿弥陀如来であり、左側は観世音菩薩であり、右側は勢至菩薩である。『聞老志』の記載によると、「壇上の仏像に関して、真ん中は阿弥陀、……観世音、勢至は並列しており、多聞天、持国天は両側に立ち、六地藏は後ろにある。」という。このように、光堂に設けられた仏像は、三尊のみではないと思う。

〔『聞老志』：壇上仏像中立者弥陀是乃定朝所作観音勢至相並於其前多門持国両立六地藏擁後〕

- ②②仏家の「七宝」について、異なる説がある。『阿弥陀経』の記載によると、金、銀、瑠璃、玻璃、しゃこ、赤珠、瑪瑙などの七物である。光堂須弥壇の四隅には、金の柱と珠の扉があり、七宝が厳かに飾っているが、長い間修繕しておらず、風に吹かれ、雨に濡れ、雪に朽ちたため、「七宝が散逸」した状況は免れなかった。
- ②③藤原氏が滅亡した後、中尊寺も日増しに荒れた。百六十年を経て、鎌倉末期になると、正応元年（一二八八）に執事している北條貞時と前武蔵守北條宣時が、征夷大將軍惟康親王の命令に従って、宝字形の「單堂」（日本語は「覆堂」、「套堂」或いは「鞘堂」という）を建設し、大きさは五間（9.1平方メートル）ぐらいで、光堂を取り囲んでいた。その後、室町時代元中元年（一三八四）になると、屋上が修繕され、江戸時代になると、伊達政宗が改めて修繕した後、代々の藩主がそれを保護していた。
- ②④「須臾」の原文は「暫時」であり、すなわち、仏家が言う「刹那（Ksana）」

である。人の世は長いと言うが、永遠の時間に対していえばとあつという間になり、千年の古物も最後つい幻になる。

②⑤原文：「五月雨の 降のこしてや 光堂」。この言葉の初稿は「五月雨や 年年降りて 五百たび（五月の梅雨は、毎年いつも通り来てすでに五百回だ）」である。

⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』（1981年3月印刷本、2004年3月修訂本出版）

平泉

藤原世家三代荣华^①，也不过一枕黄粱，当年的秀衡馆^②如今已成为一片田野，只有七八里外的大门还留有点遗迹，金鸡山^③依然如故。登上高馆^④眺望，北上川^⑤自北向南滚滚而来。此乃奥州第一大河。衣川^⑥绕过和泉城^⑦于高馆下汇入北上川。泰衡的旧馆隔着衣关^⑧，紧锁南部^⑨，以防夷人进犯。当年群臣汇聚于此，赫赫功名也只是昙花一现，而今荒草萋萋，正如诗云：“国破山河在，城春草木深。”^⑩脱笠席地而坐，吊古思今，叹时光之易逝，亦怆然而涕下。^⑪

芳草萋萋岩石青，
勇士功名梦一抔。^⑫

曾良句：

水晶花，白灿灿，
见苍发兼房浴血战^⑬。

久享盛名的经、光二堂^⑭神龛，经堂内尚有清衡、基衡、秀衡三尊将军的塑像。其灵柩纳于光堂，除此，光堂内另置佛像三尊。殿堂的雕梁已剥落，佛家七宝遗散，珠门破朽，金柱也被风霜雨雪所摧损，一派颓废气象。后人将断墙颓垣重新围起又盖上新瓦，才留下今日这些旧迹，作为千古的纪念。

年年梅雨处处晦，
光堂犹闪旧时辉。^⑮

- ①指藤原清衡、基衡、秀衡三代世家。清衡在寛治三年（1809）以陆奥押领使的身份确立了在奥州的实权地位，到秀衡一代达到了荣华繁盛的顶峰。
- ②秀衡馆，即秀衡所建之馆。也称平泉馆。秀衡为基衡之子，与源赖朝对峙，庇护源义经。
- ③金鸡山，秀衡为镇守平泉，在平泉馆后筑起一座形似富士山的山冈，并在顶上埋下两只金制鸡，故得名。
- ④高馆，源义经的住所，传说也是义经死的地方。
- ⑤北上川，奥州最大的河流，流入石卷港。
- ⑥衣川，和歌吟诵的景点之一。北上川的支流。
- ⑦和泉城，秀衡的第三子和泉三郎忠衡的住处。
- ⑧泰衡，秀衡的次子，文治五年（1189）遵源赖朝之命围杀源义经和亲弟和泉三郎忠衡，后自己又被源赖朝杀死。衣关，和歌吟诵的景点。
- ⑨南部，人名。平泉以北以盛冈为中心是南部氏的领地。
- ⑩语出杜甫《春望》。
- ⑪见陈子昂《迁幽州台歌》：“念天地之悠悠，独怆然而涕下。”
- ⑫芭蕉面对眼前的荒凉景象，感慨万分，昔日的荣华如梦幻般。战争的残忍令多少人尸骨遍地。其诗境与杜甫的《春望》有同工异曲之趣，将自然的永恒与人生的暂短相比而兴叹。
- ⑬兼房，义经妻子的乳母。据《义经记》记载，在高馆沦陷之日，她最后看到义经夫妇死去，便放火烧了高馆与敌奋战，在烈火中壮烈死去。
- ⑭经、光二堂即经堂、光堂。经堂，藏经文的殿堂，清衡建，藏有经书万余卷。光堂，金色殿堂，由清衡建于天治元年（1124），光堂是江户时期以后的称法，藤原三代的棺椁置于此处。
- ⑮全句释义为：正值梅雨季节，阴雨蒙蒙，处处灰暗。只有光堂金碧灿烂，闪耀着昔日的光辉。

〈閻小衛・陳力衛訳の日本語訳〉

平泉

藤原世家三代の栄華^①は、黄粱一炊の夢に過ぎない。昔の秀衡館^②は今もう一面の田野となり、七八里離れた大門にだけ遺跡がまだすこし残っており、金鶏山^③は依然として昔のままだ。高館^④に登って眺めると、北上川^⑤はとうとうと北より南

へ流れてくる。これは奥州一の大河だ。衣川^⑥は和泉城^⑦を廻って、高館の下に北上川へ流れ込む。泰衡の古い館は衣関^⑧を隔てとして、南部^⑨をしっかりと抑えて、それで夷人の来襲を防いでいた。当時、群臣がここに集まり、光輝く功名も一時だけのようなものだ。今は雑草だけが生き茂っている。まさに詩に言うように、「国破りて山河在り、城春にして草木深し」と。^⑩笠を脱いでその上に座ると、昔をしのんで今を思い、時の過ぎ去りやすいのを嘆き、悲しみにくれて涙を流した。^⑪

かぐわしい草が生い茂り、岩石が青し
勇士の功名はひとすくいの夢のようだ。^⑫

曾良の句：

水晶の花、真っ白だ。
白髪の兼房が血みどろになって戦う姿^⑬が見える。

経、光二堂^⑭の仏壇は昔から有名で、経堂には清衡、基衡、秀衡三将軍の像がまだ残っている。その棺が光堂に納めてあり、そのほかに、光堂には三尊の仏が別に安置されている。彩色を施した殿堂の梁はすでに剥げ落ちて、仏教の七宝は散逸し、珠の扉は朽ちて、金の柱も霜雪に破られ、荒れ果てた光景だ。後代の人はこの荒れ果てた所を再び壁で囲み、また新しい瓦をかぶせて、やっとこれらの旧跡を今日までに残して、千古の記念とした。

毎年梅雨が降り注ぎ、至る所が暗くなる。
光堂だけがまだ昔のように輝いている。^⑮

- ①藤原清衡、基衡、秀衡の三代を指す。清衡は寛治三年（1809）に陸奥押領使という身分で奥州を占める権力を確立し、秀衡の代になると一番栄えた。
- ②秀衡館は、すなわち秀衡が建てた居館であり、平泉館とも呼ぶ。秀衡は基衡の息子であり、源頼朝と対峙し、源義経を庇った。
- ③金鶏山。秀衡が平泉を守るために、平泉館の後ろに富士山のような山を作って二羽の金製の鶏を埋めたので、この名前を得た。

- ④高館は源義経の居館であり、義経が死んだところだと言い伝えられた。
- ⑤北上川は奥州の最大の川であり、石巻湾に注ぎ込む。
- ⑥衣川は和歌を朗誦する一つのスポットであり、北上川の支流である。
- ⑦和泉城は秀衡の三男と泉三郎忠衡を住んでいた居館である。
- ⑧泰衡は秀衡の次男であり、文治五年（1189年）に源頼朝の命令に従って源義経、弟及び泉三郎忠衡を殺そうとした。のちに、自分が源頼朝に殺された。衣関は和歌を朗誦するスポットである。
- ⑨南部は人名である。平泉の北側、盛岡を中心とするところは、南部氏の領地である。
- ⑩杜甫の「春望」からの言葉である。
- ⑪陳子昂の「遷幽州台歌」：「念天地之悠悠、独愴然而涕下」。
- ⑫松尾芭蕉は目の前の荒れた景色を見て、心に深く感じているのは、昔の栄華と富貴が夢幻であることである。戦争の残忍さはたくさんの人の命を奪った。その詩の境地は杜甫の「春望」と同じ趣旨であり、自然の永遠さと人生の短さを比較して感嘆した。
- ⑬「兼房」は義経の奥様の乳母である。「義経記」の記載によると、高館が陥落した時、兼房が義経夫婦の自殺を見て館舎に火をつけ、敵と戦って大火で亡くなった。
- ⑭経、光二堂は、すなわち、経堂と光堂である。経堂は、経書を保存する殿堂であり、清衡によって建てられ、一万巻以上の経書を保管している。光堂は金色の堂であり、清衡が天治元年（1124）に建設した建物である。光堂は江戸時代以降の呼び方で、藤原三代の棺はここに置いている。
- ⑮全句の意味は、ちょうど五月の梅雨の季節であり、曇りや雨で、どこもうす暗い。光堂がきらびやかで、昔の輝きを放っている。

二. 各訳分析

中国訳のうち、問題となる箇所は、1「大門の跡ハ一里こなたに有り」2「北上川南部より」3「国破れて山河あり、城春にして草青ミたりと笠打敷て時のうつるまでなみだを落し侍りぬ。」4「夏艸や兵共が夢の跡」5「卯花に兼房みゆる白毛かな」6「暫時千歳の記念とはなれり。」7「五月雨の降残してや光堂」の7か所である。

1 「大門の跡ハ一里こなたに有り」

①張香山訳『奥州小道』、③鄭民欽訳『奥州小道』、④陳徳文訳『奥州小道』、⑤鄭清茂訳『奥之細道』は、大門からの距離が一里となっているが、②陳岩訳『奥州小路』、⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』は、八里または七八里離れたとする。原文では一里となっている。これは一里の長さが日本と中国では違うために起きた差異である。現在の中国では500m、日本では約3.9kmであり、実態の距離を伝えるためには八里と翻訳するのが適切。但し芭蕉は実際に何を見て書いたかは諸説ある。小林文夫氏は平泉の大門は、焼失したのち、南大門にあった地蔵が金沢村大字に置かれたところから、金沢村が南大門と誤り伝えられたと指摘する^(注3)。尾形侑氏は、金沢大門・一関間の距離約一里半を平泉館跡との距離と混交して書いたと推察^(注4)、この問題について③鄭民欽訳『奥州小道』の「大門は平泉館の南大門を指すようである。」と⑤鄭清茂訳『奥之細道』は、ほとんど尾形評釈の影響を受けて「大門」は藤原三代の官庁平泉館の正門だと思いますが、松尾芭蕉が言ったのはおそらくこの正門の遺跡ではない。毛越寺の南正門と言うのもあれば、金沢（加沢）村の南正門と言うものもある。諸説入り乱れていて、どちらが正しいか今だに定説がない」と注をつけている。

2 「北上川南部より」

北上川南部とは平泉の北方、南部氏十万石の領土であるが、④陳徳文訳『奥州小道』では「南より北へ流れてゆく川だ」と方角と誤解している。一方、⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』は「とうとうと北より南へ流れてくる。」は、他訳が「南部」と地名を出しているのに対し、「南部」が北にあることを踏まえ、川の流れの方角を示している。

3 「国破れて山河あり、城春にして草青ミたり」

「草青ミたり」原文部分は杜甫の詩では「草木深し」である。杜甫の詩をそのまま引いている中国訳は②陳岩訳『奥州小路』、④陳徳文訳『奥州小道』、⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』である。一方①張香山訳『奥州小道』「草青々し」、③鄭民欽訳『奥州小道』「草木青し」、⑤鄭清茂訳『奥之細道』「草青し」である。③鄭民欽訳『奥州小道』や⑤鄭清茂訳『奥之細道』では注に杜甫の「春望」「国破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。」を引く。このうちさらに尾形侑氏がこの杜甫の詩に湖伯雨の「望淮」「春風何処無生意、白骨城辺草自青」を引用したことを紹介している。尾形氏は「白骨城辺草自青し。」を重ねて「草木深し」を「草青ミたり」と転ずることで古戦場懷古の意

を利かせたもの。一中略—これは眼前の夏草から、春草を詠み込んだ古詩の世界へと思いを馳せたもの」と解釈されている^(注5)。

この杜甫の『春望』と芭蕉の平泉のこの部分の関係について曹元春氏は、『春望』の「感時花濺淚 恨別鳥驚心」の影響を受けて「行く春や鳥啼魚の目は泪」を詠んだとし、「国破山河在 城春草木深」については「国都は賊に破壊され、城池もひどく壊された。山と河の自然は依然として、人間の悲劇をよそにして存在している。昔、にぎやかであった長安城には今、人が見えない。ただ草と木だけは去年の春と同様に茂って深くたちこめている」^(注6)。「これは破壊された国都の状態を、何ごころない様子で存在し続ける自然の様に対比して、人の世の無常を強調し、その悲哀を歌いあげたのである。」一中略—「国は壊された。ところが山と川という大自然は国家の興亡変化に超然として存在する。変化するものとしめないものの対比で、人の世の無常を表現した。変化するものとしめないものの対比で、人の世の無常を表現した。」として「えりすぐった忠義の武士たちが華々しく戦った後は一面の草原となってしまった。芭蕉はこんな景色を眼前にして、思わず同じ状態を描写した杜甫の詩句を思い出したのであろう。」杜甫の「草木深」が芭蕉によって「草青」にされたことについて、曹氏は「記憶の誤りではなく、眼前の茂っている夏の草を生き生きとして描き出した」とする^(注7)。(曹氏は芭蕉はこの例の他にも杜甫の詩を一字変えて受容した例をあげている。)曹氏は「芭蕉の言う「国破」は秀衡の館のことで「山河」はそれぞれ金鶏山と北上川をさしている。杜甫の詩句を借用して、一方では、当時の自分の感傷の心情を表わして、他方では杜詩に絵が有れた無常観にひどく心を打たれたことを示した。一中略—「夏草や兵どもが夢の跡」の自然の悠久なのに比べると、人間のしわざはまことにはかないものであると身にしみて感じたことを描き出した。一中略—杜甫の詩句に憂国憤世の情が含まれるし、人の世の無常に対する悲哀の情も含まれる。一中略—芭蕉は人の世の無常を感傷する面から杜甫のこの詩句を受け取ったのである」。

対して高春玲氏は『春望』の解釈が、自然観が中国と日本の場合に違いがあることを指摘している。「平泉に着いた芭蕉は眼前に青々と茂っている草に心奪われて『春望』を言い換えた」中国文人の自然観は「天人合一」であり、自然に対して強烈な主観性を持っている。対して日本人は自然と人間に「根源的紐帯」結びつきがある。それは地震、台風などの自然災害が多いことが日本人の独特な自然観に影響を与えている、とする。そして「杜甫は眼前の長安の荒廃の様子が表現されている。芭蕉は杜甫のように荒廃した眼前の世界を生々しく描いたのではない。五百年という長い歳月を隔てた古戦場跡を眺め、感慨を表すために杜甫の『春望』を借用し、単にそのまま引用せず「草青みたり」と詠む。」高氏は尾形氏の解釈を尊重し、「永遠に生い茂る夏草と、はかなく瞬時に亡び失せ、夢と

消えた義臣の勇戦が対置され、そこに「無常」、また「不易」の「理」もある。」と述べたが、高氏自身は当然ながら中国人として憂国の詩として受け止めていることに重点が置かれる。中国人の詩句の解釈は「残るものが存在しない」「人の通った跡がない」「昔の繁栄と今の荒れすたれた風景との比較によって人を悲しくさせる」という荒れ果てたもので美の意識はないもの、憂国の思いであるに対し、日本人の解釈は国が破れたが、春が訪れて、草や木が以前と同じように青々と生い茂っているという違いがあると指摘している^(注8)。

確かに杜甫の詩句は荒廃した国を目の前にして国を憂いたものであり、眼前の生い茂った草を見ながら五百年前の戦を思い浮かべる芭蕉とは趣が違う。しかしそれ以上に自然と人との関係が日本と中国に違いがある点に問題がある。芭蕉が感じているのは美ではなく、あくまでも無常であることに重点を置くべきである。日本人は自然に信仰的感情を持っている。人間は自然の前には矮小なものに過ぎないという思いは現代の我々も持っている。義や野心を持った人間の思いがどれほど激しくとも、所詮壮大な自然や悠久の時に飲み込まれて何事もないかのようにになってしまうという無常感を日本人は体得している。その思いが「笠打敷て時のうつるまでなみだを落し侍りぬ。」に繋がる。この涙は時や自然の無常さへの「あはれ」の涙である。この部分中国訳では①張香山訳『奥州小道』で「戦った人の死体が今すでに叢となった」「戦った人の死体が今すでに」と生々しく訳しているのも、戦禍を憂う『春望』の影響下にあるからであろう。②陳岩訳『奥州小路』が「悲しい涙が湧いてきた。」とあるが、どれほどの人の思いや情熱が費やされても長い歴史の中でははかないものであるという無常感に涙がでてくるというものであり「悲しい」という単純なだけではない。芭蕉の心境を表現している訳としては③鄭民欽訳『奥州小道』が「その赫々たる功名が雲のように過ぎ去った」と「昔をしのびながら」「時の流れ」④閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』「昔をしのんで今を思い、時の過ぎ去りやすいのを嘆き」がある。これらは五百年前の時間を意識した訳である。⑤閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』では尾形氏の影響を受け「松尾芭蕉は目の前の荒れた景色を見て、心に深く感じているのは、昔の栄華と富貴が夢幻であることである。戦争の残忍さはたくさんの人の命を奪った。その詩の境地は杜甫の「春望」と同じ趣旨であり、自然の永遠さと人生の短さを比較して感嘆した。」と注している。

4 「夏草や兵どもが夢の跡」

この句は、芭蕉の『春望』受容の結果生まれた。①張香山訳『奥州小道』「武士たちは功名の夢を抱く。戦った遺跡のところに、夏の草が生い茂る。」「武士たちが功名の夢を抱く」では、武士が自分の野望を夢見するということのみになる。夢には「はかない」とい

う意味が込められている。かつてここで武士が功名を求め戦い合ったそのこと自体が夢のようにはないという意味を込めている。②陳岩訳『奥州小路』「昔戦争があったが、その功名と栄華はすべて夢となり、夏の草が生い茂っている。」③鄭民欽訳『奥州小道』。「夏の草が寂しくて、功名は昨日の古い戦場、一枕にして黄粱の夢を見る。」④陳徳文訳『奥州小道』「夏草はよく茂り、将兵の夢の跡は探しがたい。」⑤鄭清茂訳『奥之細道』「夏の草は生い茂り兵士たちは命を用いて仁を求めようとした夢幻一回にすぎない」⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』「かぐわしい草が生い茂り、岩石が青し勇士の功名はひとつの夢のようだ。」「夢」は兵士たちが見た夢であり、それが夢のように儚いという重層的に掛っている。兵士たちが見た夢（野望）としては①張香山訳『奥州小道』④陳徳文訳『奥州小道』⑤鄭清茂訳『奥之細道』、五百年前に戦が夢と儚くなってしまったという訳が②陳岩訳『奥州小路』、③鄭民欽訳『奥州小道』⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』である。また「夏草」に対し、③鄭民欽訳『奥州小道』は「夏の草が寂しくて」とあり、これは杜甫『春望』を憂国の詩として受容した影響であろう。一方⑥閻小衛・陳力衛訳は「かぐわしい草」「岩石は青し」と訳している。これは本文「草青ミたり」を美しいものとして受容したのであろう。自然（草）を美と感じた訳であり、芭蕉の心とは隔たりがある。

5 「卯花に兼房みゆる白毛かな」

まず「卯花」の訳が①張香山訳『奥州小道』②陳岩訳『奥州小路』④陳徳文訳『奥州小道』⑤鄭清茂訳『奥之細道』⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』が「水晶の花」となっている。「卯の花」を「水晶の花」と訳すことについて日本国語大辞典に「卯の花」の異名として「雪見草」とともにあげられている。小学館「中日日中辞典」にも「水晶花」と訳され、周作人も使用している。但し水晶花は、透明な印象があり、白髪（白毛）の兼房が血みどろになって戦う姿に喩えるには、違和感がある。③鄭民欽訳『奥州小道』は「マルバウツギ」と花の名で訳している。卯の花の白さが義経の老忠臣兼房の白髪であり、また兼房という人名への説明が必要であり、それぞれ注をしているが、⑤鄭清茂訳『奥之細道』の注が「『義経記』によると、兼房は大納言平時忠（一一二七—一一八九）の娘の「乳人」（保護者）であり、娘を源義経に嫁がせた時、兼房も一緒に付いて行って義経の家臣になった。義経が平泉に流亡し、高館の戦いの後、兼房が義経夫婦の自殺を見て館舎に火をつけた。そして、敵将長崎太郎を倒して、その弟長崎二郎を捕まえて彼と一緒に大火に飛び込んで犠牲した。」や⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』の「「兼房」は義経の奥様の乳母である。「義経記」の記載によると、高館が陥落した時、兼房が義経夫婦の自殺を見て館舎に火をつけ、敵と戦って大火で亡くなった。」と尾形氏等の注釈を参考にしたと思われる。兼房がどの

ような人物であるかがわかってこそ曾良の句が理解できる。

6 「暫時千歳の記念とはなれり。」

「暫時」とは「少しの間、しばらく」なので③鄭民欽訳『奥州小道』④陳徳文訳『奥州小道』の「とりあえず」、⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』の「やっと」はやや不適か。「千歳の記念」の表現は、「壺の碑」（市川村多賀城）の項に「ここに至りて疑なき千歳の記念」とあり、この他、「日光」の「千歳未来」など芭蕉の好む表現である。藤原三代は五〇〇年前であり、

千年は文飾である。「しばらくは古から続いてきた建造物を記念として存続させることができるようになった」という意。従って①張香山訳『奥州小道』「やっとしばらくの間この古い記念物を保存することができた。」は適当。②陳岩訳『奥州小路』「千年前の記念物はなんとかしばらく保存することができた。」③鄭民欽訳『奥州小道』「とりあえず千秋を思う記念にしている。」⑥閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』の「これらの旧跡を今日までに残して、千古の記念とした。」も一応古へを思うという点で可か。④陳徳文訳『奥州小道』。「とりあえず千秋の記念となるだろう。」は、言葉足らず。⑤鄭清茂訳『奥之細道』「しばらくこの千載が一瞬のごときの遺物を保存することができた」は訳としては不適か。

7 「五月雨の降り残してや光堂」

①張香山訳『奥州小道』「梅雨は、もしかしたら、光堂だけに降り注がなかったかもしれない。」の注は「外側に金箔が貼り付けられている。この俳句の意味は、梅雨が降り、景色がぼんやりしているが、光堂はきらきらと金色の光が輝いている。雨は光堂にだけ降らなかっただろう。」という表現からは鞘堂の中に光堂が入っているとは解釈できない。雨の中、光堂が輝いている印象である。⑤鄭清茂訳『奥之細道』「五月の梅雨は、まさかわざと避けたのだろうか。光堂は無事のままである。」も鞘堂が意識されていないような訳である。この注に「初稿の「五月雨や 年年降りて 五百たび」を紹介している。閻小衛・陳力衛訳『奥州小道』「毎年梅雨が降り注ぎ、至る所が暗くなる。光堂だけがまだ昔のように輝いている。」も注の「全句の意味は、ちょうど五月の梅雨の季節であり、曇りや雨で、どこもうす暗い。光堂がきらびやかで、昔の輝きを放っている。」を見るとやはり鞘堂をイメージしにくい。前の文脈を「堂の周囲にまた塀を立てて、風雨を防ぐために、屋根を覆い」の意味を理解していなかったか。④陳徳文訳『奥州小道』「五月に雨が急いで（降り注ぎ）、光堂は依然として昔の風采が残っている。」では「降り残してや」の「や」の部分で反映されていない。一方②陳岩訳『奥州小路』「光堂が黄金の輝きを放つ。百年の間に五月の梅雨は絶えず、ただその中に落ちないだけ。」③鄭民欽訳『奥州小道』「光堂は未

だに梅雨に降り注がれることなく、今日に至ってもなお輝いている。」は鞘堂のために光堂が濡れないことが伝わる。

以上、問題点を各訳比較してみた。大きな問題は杜甫『春望』詩の受容問題は日本人と中国人の自然と人との関係の民族的差異が見られたことと、鞘堂と光堂の関係を映像として想像しにくいために、芭蕉が詠んだ風景と必ずしも一致しないことがわかった。そしてこの問題が「夏草や兵どもが夢の跡」と「五月雨の降り残してや光堂」の句の解釈に関わるのである。次回も代表句をとりあげ、その句の背景をどのように理解しているかをみていく。

注

注1 拙稿「中国語訳『奥の細道』の比較研究」(1)、(2)、(3) (札幌大学総合論叢第44号・46号・48号 (2017年・2018年・2019年10月))。

注2 閻小妹は1982年黒竜江大学日本語学科を卒業。1989年に東京都立大学人文科学研究科で博士課程を修了。信州大学経済学部教授。専攻は日本近世文学、主に江戸時代における中国文学の受容を研究。著書は『吾輩は猫である』(人民文学出版社)『東洋の思想』、『甘えの構造』『奥の細道』の中国語訳など。陳力衛は1982年黒竜江大学日本語学科を卒業。1984年北京大學東語学部の修士卒業。1990年に東京大学日本言語文学科で博士課程を修了。1991年から1993年間は、日本国立国語研究所で外国人研究員。2009年に日本国立国語研究所で外国人研究員、日本成城大学の教授。日本語史、日中言語交流史を専攻としている。『和製漢語の形成と展開』『図解日本語』『日本の諺・中国の諺』『日本語史概説』などがある。翻訳は『奥の細道』『風土』など。(日本古典文学大系46巻、岩波書店)、『松尾芭蕉集』(日本古典文学全集41巻、小学館)及び『新訂 奥の細道』(潁原退蔵、尾形仿校注、角川文庫)を参考。2001年の盛夏序には『奥の細道』との出会いが書かれている。『奥の細道』に触れたのは、黒竜江大学三年の時であり、卒業後1987年10月草加市で開催された「奥の細道」三百周年国際シンポジウムで、「松尾芭蕉と中国文学」というテーマで発表したとある。

注3 小林文夫氏「平泉前後の芭蕉」『連歌俳諧研究』三(俳文學會・昭和27年8月)

注4 尾形仿著『おくのほそ道評釈』平成13年5月 角川書店。

注5 注4参照。

注6 曹元春氏「杜甫の『春望』と芭蕉」(第13回国際日本研究集会研究発表・平成元年11月初出・『杜甫と芭蕉』白帝社・平成12年3月に収録)

注7 曹氏は芭蕉はこの例の他にも杜甫の詩を一字変えて受容した例をあげている。

注8 高春玲氏「『おくのほそ道』における漢詩の考察—平泉の章—」(『言語と文明』第11号2013年3月麗澤大学大学院言語教育研究科)

追記 本稿は2019年度札幌大学研究助成金の成果の一つである。